

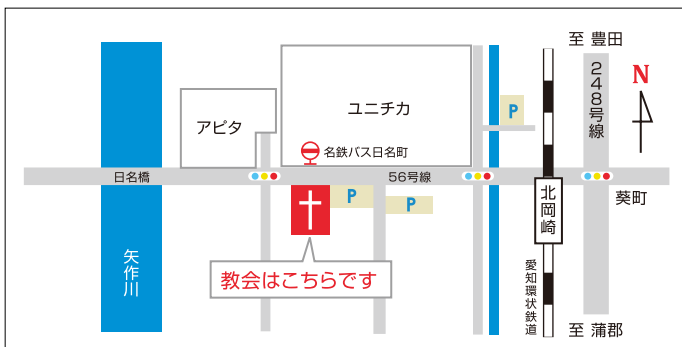
BIBLE + MESSAGE

いつも喜んでいなさい。…すべての事について、感謝しなさい。

(Iテサロニケ5章16・18節)

上記の聖書のことばは、神が人間に望んでおられることとして、パウロという人物が書き記しました。このことばにあるとおり、いつも喜び、すべてのことに感謝することができるならば、それはどんなに素晴らしいことでしょうか。世界中の人々が皆、そのようであったならば、争いが起きることはないでしょうし、その他のさまざまな問題も、きっと解決されると思います。

しかし、現実の人間の姿は、まったく正反対ではないでしょうか。三浦綾子さんも言っているとおり、人は感謝の言葉よりも、不平不満を口にしてしまいやすいのだと思います。私自身もそのようなことが何度もあります。それは、私の心にも「罪」があるからです。罪は他の人のことよりも、自分のことを最優先にさせます。自分を中心にして世界を見るのです。どうすれば、この罪の問題を解決することができるのでしょうか。上記の聖書のことばの続きには、「キリスト・イエスにあって」とあります。ここに答えがあります。



- ◆名鉄バス「日名町」前
- ◆愛知環状鉄道「北岡崎駅」から西へ徒歩3分
- ◆アピタ北岡崎店 筋向かい



スマホで上記のQRコードを読み込むと地図を表示できます。

【日曜学校】日曜：午前10時～10時45分 【礼拝】日曜：午前11時～12時半
【午後の集会】日曜：午後3時～4時半 【聖書研究会】木曜：19時半～21時

聖書を読んだ日本人

三浦綾子さんの作品を読んだことのある方は多いと思います。特に有名なのは、1963年の朝日新聞社による懸賞小説に投稿された「氷点（ひょうてん）」でしょう。この作品は大ベストセラーとなり、映画化され、数度にわたってテレビドラマにもなりました。

三浦（旧姓・堀田）綾子は九人兄妹の第五子として北海道旭川市に生まれました。彼女は高等女学校を卒業した後、小学校の教師として働くようになります。しかし、終戦をきっかけとして、彼女は自ら関わった軍国主義教育に疑問を抱くようになり、1946年、教師の働きを退職するのです。

さて、この頃、綾子は肺結核を患います。病の苦しみのなか、彼女

は自暴自棄になり、「自分など、どうなつてもいい。死んだつて構わない」と考えるようになります。しかし、敬虔なクリスチャンであった幼馴染の前川正より励ましを受けると、次第に生きる気力を取り戻していき、やがて綾子自身も信仰を持つに至るのです。彼女は闘病中にも関わらず、小野村林蔵という牧師より洗礼を受け、クリスチャンとしての歩みを始めるのでした。

綾子の生涯は、常に病との戦いでした。肺結核だけでなく、脊椎カリエス、心臓発作、帯状疱疹、ガン、パーキンソン病など、多くの病を患います。しかし、彼女は1999年に亡くなるまで、クリスチャンとしての信仰に根ざした作品を次々と書いていきました。そこには、夫であ

る三浦光世の献身的なサポートがあつたそうです。

綾子は、このような言葉を残しています。「九つまで満ち足りていて、十のうち一つだけしか不満がない時でさえ、人間はまずその不満を真つ先に口から出し、文句を言い続けるものなのだ。自分を顧みて、つくづくそう思う。なぜ私たちは不満を後まわしにし、感謝すべきことを先に言わないのだろうか。とても考えさせられる言葉ではないでしょうか。彼女は一人のクリスチャンとして、自らの心の内にもある人間の



三浦綾子と夫の三浦光世

「罪」の問題と真剣に向き合っていたのだと思います。



三浦綾子
(みうら あやこ)

1922年～1999年